

第7分科会「里山と野生動物」

講演会・現地交流会「里山・鎮守の森に生きるものたち」

日時：2006年4月30日
10:00～17:00

場所：千葉県立中央博物館（午前）
谷当グリーンクラブ（午後）

参加者：62名（第2部は約30名）



趣旨

里山・森・野生動物・人……その一連のつながりのなかで、感じる
こと、教わること、考えさせられること、などいろいろな感情が湧き
上がってきます。千葉県内に於いても、様々な野生動物たちと人との
間によこたわる深刻な問題（開発問題、農作物被害問題）があるのが
現状です。今回の野生動物分科会ではニンゲン側の課題を踏まえなが
ら、鎮守の森の樹々と密接な関係を持っているムササビなどの野生ほ
乳類、そして野生動物と人との距離の取り方と言ったテーマについて、
永年研究調査に従事してこられた専門家の方々から講演を頂くと共に、
野外に於いて千葉県の土の感触を味わいながら、電気柵（農作物被害
対策）の設置に関するプチ実習などを行いつつ、意見交換や交流を行
いたいと企画しております



講演会

講演1「里山・鎮守の森に生きるものたちと樹洞の役割」

川道武男（関西野生生物研究所・理学博士）

1944年富山県生まれ。理学博士（北大）。ナキウサギ、ムササビの比較社会
学、単独性ほ乳類の社会を研究。生物多様性JAPAN所属。著作に「原猿の森」
「ウサギのはねてきた道」「冬眠するほ乳類」「温暖化に追われる生き物た
ち」「A threat to life」など。

古来より、里山の一角に巨木を含む鎮守の森が残されてきた。これらの森
はムササビ、リス、タヌキ、フクロウなどの野生生物にすみかや食物を与え
るだけでなく、そこに暮らす人々が野生生物と身近に出会い、野生生物と人
が共存してきた場所である。また、日本在来の生態系を現在にまで残してき
た貴重な場所でもある。しかし、近年、開発の波が押し寄せ、こうした鎮守
の森は周囲の森から分断されるだけでなく、森の巨木が朽ち、倒れると後継
樹の育成も無いまま、森の規模は縮小の一途をたどっている。
こうした中で樹医などによる巨木を守るという動きがあるが、
枯れた枝を払い、内部にできた空洞を埋めるなどの治療により、
それらの樹洞をすみかに利用していた生物は僅かに残されて
いたすみかを失うことになってしまう。枯れ枝、倒木は虫やキノコへ栄養分を与え、それらは森の生き物の食物となる。樹洞
は寝場所や子育ての場所として多くの動物に利用される。枯れ
かけた木を見たとき、人は森の衰退を感じ、こうした木を鎮守
の森から取り除き（ゴミのように）、森の若返りを図ることが
多い。しかし、森の生態系にとって、朽ちかけた木の役割が大
きいことを人は再認識する必要があるのではないかと。



講演2「里山・人と野生動物の関係・餌付けする？それとも石を投げる」

川道美枝子（関西野生生物研究所・理学博士）

1947年北海道生まれ。理学博士（京大）。シマリスの行動社会やアライグマの対策を研究。生物多様性 JAPAN 所属。関西野生生物研究所主催。IUCN/ISSG（世界自然保護連合・侵略的外来種専門委員）。著作に「シマリスの冬ごし作戦」「森をつくったのはだれ」「ツバメの街」「冬眠するほ乳類」「移入・外来・侵入種」など。

近年、日本各地でニホンザルが民家近くへ出没し、農作物や人への被害が報告され、対策に頭を悩ます自治体も多い。かつて農耕をしていた人々は野生動物を見ると石を投げたり、追い回すことが多かった。そのため野生動物は人を恐れ、人里近くで暴れ回るものは多くなかった。しかし、ライフスタイルの変化とともに、自然との共存がうたわれ、人々は石を投げる代わりに、野生動物に餌付けを行う場所も増えてきた。日本各地で餌付けされたニホンザルが数を増大させ、行動も大胆になり問題を引き起こしている。農業や生態系に大きな影響を与えることで特定外来生物に指定されたアライグマやヌートリアにさえ、餌付けしている人々が現実に存在する。また、残飯やゴミ、農作物の収穫残しなども里山周辺に放置されるため、それらに依存して出没する野生動物も多い。餌付けすることでもなく、石を投げることでもなく、人が野生生物と適正な距離を保ちながら共存する道を探ることが必要である。



現地交流会&意見交換会（谷当グリーンクラブ）

- ・アウトドア・フリーディスカッション
- ・電気柵の仕組み・設置実習（サージミヤワキ担当）
- ・バーベキュー他

内 容

- ・私たち人間は野生動物に対して、一方では餌付けをし、一方では農作物を荒らすと石を投げる（駆除する）という二面性をもっている。
- ・鎮守の森は樹洞をはじめとした多面的な機能を野生動物に提供している
- ・餌付けは環境教育になる一方、様々な軋轢を生み出す原因にもなっている



結 論

- ・昔のように人間と動物が共存していくためには、里山を愛し里山のサイクルを回していくことが、必要である。
- ・樹洞を守ること自体、意義のあること。餌付け自体の是非は、個々の事例による難しい問題であり、更なる検討を要する。
- ・野生動物との共生には、専門家の知識が必要であり、その普及には地元の人たちとの連携、さらに地元の人たちの協力と理解が不可欠である。

まとめ

専門家と地元民とのコミュニケーション、連携プレーこそが必要である！